

## 「安心」は自らが築く「信頼」社会の実現へ

NPO 法人 埼玉県建設発生土リサイクル協会  
事務局長 小重 忠司



2011年3月11日の東日本大震災によって引き起こされた福島原子力発電所の事故は、日本の社会システムの脆弱さを露呈させました。取り分け化石燃料の少ない日本にとって、電気エネルギーの生産を核燃料に頼ってきたことの是非を改めて問い直す機会となりました。日本人の特徴として「曖昧さ」が挙げられることが多いですが、こと安心・安全に関しては、日本人の態度は「明確」になります。別の言い方をすると、「日本人は安心・安全の白黒をハッキリ付けたがる」傾向にあるのです。

日本機械学会誌『東日本大震災調査・提言活動中間報告』（2012年6月号）には、科学技術の安心・安全に対して、欧米人と比べて日本人はグレーゾーンを嫌う傾向にあると書かれています。この傾向によって、日本の工業社会は世界が追随できない品質のモノづくりを推進できたと言えますが、反対に少しでも危険な要素があると（特に日進月歩の医療分野においては）国内での承認が進まず、海外の先端技術が日本で応用されるまでに大きな時間を要する「デバイスラグ」という状況を生んでしまっています。

また、山岸俊男が『日本の「安心」はなぜ、消えたのか』（集英社インターナショナル、2008）で述べているように、今、日本は「安心社会から信頼社会への転換」のなかにあるということなのかも知れません。国や社会から一方的に与えられてきた安心は崩れ、自ら安心を見つけ出す信頼関係が必要になってきたということでしょうか。同著のなかで、日本人は集団主義とされているかも知れないが、実は世界と比べて個人主義の強い民族であり、戦略的に集団社会に適応する能力を身に付けているに過ぎないと実験データを交えながら論じています。

今のインターネットにある情報量は人間の脳では受け止められないほど大きくなっており、いついかなる時も迷うほど数多くの選択を迫られています。人間はどのように生きることが正解なのか。今日も思い悩み、明日もまた思い悩むかも知れません。また、仕事のあり方においては、誰が誰の労働を支配しているかが判断できなくなってきました。もし、誰かを特定するとしたら、自分の労働は自分で支配しているのかも知れません。それ故に、社会のなかで生きる個々人が他者を信頼し、安心・安全を自ら築く社会にすることがこれからの日本のテーマになるのではないのでしょうか。

私の所属する「地方創生事業検討会」を含め、CNCPが具体的な指針を示し、日本の行政・メディア・教育に影響を与えられる組織となれることを期待して会員活動に臨んでおります。